

論文審査の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	有馬 俊
論文審査担当者：	主査	慶應義塾大学教授 博士（政策・メディア）	稲蔭正彦
	副査	慶應義塾大学教授 博士（政策・メディア）	加藤朗
	副査	慶應義塾大学専任講師 博士（メディアデザイン）	佐藤千尋
	副査	慶應義塾大学教授 Ph.D（Communication）	加藤文俊
<p>（論文審査の要旨）</p> <p>有馬俊君の博士学位請求論文は「発酵的リフレクションモデルのデザイン」と題して執筆されたもので、全部で6章から構成されている。本研究では、過去の行為や経験を振り返るリフレクションをテーマとして、発酵をメタファーとして新しいリフレクションモデルを提案している。また、実践としてTalk Clip Boxをデザインしており、デザイン論文として取りまとめたものである。</p> <p>第1章では、研究の動機に加え、従来のリフレクションモデルを紹介した上で、発酵的リフレクションモデルの違いを論じている。</p> <p>第2章では、関連する4つの領域として、リフレクション、発酵、デジタルストーリーテリング、キュレーションについて関連研究を含めて解説している。さらに、本研究の意義と新規性について整理している。</p> <p>第3章では、本研究の核となる発酵的リフレクションモデルを提案し、研究の過程についても紹介している。発酵的リフレクションモデルは、よりオープンで、より長期的な目線を導入したモデルであることが特徴である。</p> <p>第4章では、発酵的リフレクションモデルを用いた実装のデザインについて論じている。実装例である木製オブジェのTalk Clip Boxは、キュレーターを介してリフレクションを整理して、木製オブジェを製作する。この木製オブジェは、生活に溶け込むデザインであり日々の生活において過去の行為や経験を振り返ることができる。</p> <p>第5章では、Talk Clip Boxを被験者に2ヶ月使用することでProof of Concept (PoC)を実施して発酵的リフレクションモデルの検証を質的調査法で証明するとともに、限界についても明らかにしている。</p> <p>第6章では、本研究の結論と今後の展望についてまとめている。</p> <p>本研究は、これまでの人生を振りかえるリフレクションモデルに発酵をメタファーとした新しい視点を提案し、そのモデルを実装する方法として生活に溶け込むオブジェとしてのデザイン提案をした点が独創的である。また、オブジェをデザインするプロセスにキュレーターを介して整理している点は、現代のキュレーションエコノミーとも言われているオンラインでの社会活動との親和性が高い。専門家がリフレクションのメンターになるのではなく、よりオープンでより長期的な目線を導入した点も特筆すべき点である。</p> <p>本研究は、人の人生を豊かにするための振り返りを支援することができ、新しいライフスタイルの製品やサービスへの貢献も期待できる。以上、審査の結果、本論文は博士（メディアデザイン学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。</p> <p>審査経過</p> <p>2020年1月27日 予備口頭試問審査会が開催され、2020年2月21日に審査の結果合格した。</p> <p>予備口頭試問審査委員：大川恵子君、稲蔭正彦君、加藤朗君</p> <p>2021年7月13日、9:00-11:00 博士論文公聴会がオンラインにて開催された。同公聴会終了後、オンラインで博士論文審査会が開催され、全会一致で合格を決した。なお、公聴会出席者は以下の通りであった：</p> <p>博士論文審査委員4名 来場者6名</p>			